

水の文化書誌

《雨乞い》

2003年3月、大阪・京都・滋賀において「世界水フォーラム」が開かれる。世界水フォーラム成功の祈願祭が2002年4月29日、京都の貴船神社にて行われた。翌日の京都新聞は「晴々、雨乞の神事が千年振りに再現された。皇室が平安中期まで晴天を願って白馬を、雨を願っては黒馬を奉納した。二頭の神馬が神職に手綱をとられて拝殿の周りを三周した」と報じた。生きた馬は、やがて描かれた馬に変わり、願い事を書いて奉納する現代の絵馬に変遷していく。

高原三郎著・発行『大分の雨乞』（1984年）では、絵馬と雨乞について、「農耕時代に入り、支配権力があらわれると彼等は君主水徳の觀念により、水、雨の順調に責任があるとされた。早魃が激甚となると、人を殺して神へ供え、さらに時代が下がるに代わって牛・馬が犠牲とされ、さらに生き馬に代わって木馬、紙馬を献上し、そして今日のように神社に絵馬を献上することとなった」と論じている。この書は雨乞の歴史、雨乞の習俗などから構成され、大分の雨乞をくまなく調査した結果が反映されている。また、中国、朝鮮、台湾、琉球王朝、アイヌの雨乞にも言及されている点がおもしろい。

日本各地の古来連綿と続けられてきた雨乞儀式について、膨大な資料に基づき、歴史的、体系的にまとめられているのが高谷重夫著『雨乞習俗の研究』（法政大学出版局、1982年）で、いわば雨乞研究に関するバイブルである。この中で『扶桑略記』（平安時代末期に書かれた歴史書、仏教史が中心）の推古天皇33年（625年）の条に、高麗僧惠灌に命じて雨を降らせたという記事、およそ年代記の存する限りでは、日本の雨乞資料として最も古いものである。雨乞が仏教によって始まったものではない。ただ、古代人が雨を祈ったた

たものではない。ただ、古代人が雨を祈ったたあろうと思われる神々に関する伝承がわずかに存する限りである」と、雨乞の由来が記されている。さらに、日本各地の雨乞儀式が類型化されている。宮に籠るアマノモリ。水を浴びるミソギ。地蔵を水につけ、縄でしばる雨乞地蔵動物、魚類の供儀。池や泉の水を代えて乾かす水かえ行事。池に牛・馬の糞、不浄の物を入れ雨の神を怒らせて雨を降らす。山に登り雨乞の火焚き。雨の神を喜ばせて雨を降らす雨乞踊り、能楽、獅子舞、雨乞太鼓踊り、等々。

同じ著者による『雨の神』（岩崎美術社、1984年）では、飲用水や灌漑用水を水害から守るため水神を祀ることが習俗化すると述べられており、雨水を司る雨の神として龍王や龍神が祀られ、各地に雨乞社、雨の宮、雨降社、龍王社が分布するといふ。例えば、有明海北岸佐賀県川副町は干拓で開かれた地域だが、この町には雨の神と海の神の両方を祀る龍王社が存する。さらにこの書では、泉鏡花で有名な夜叉が池伝説についても論じている。

平安の初め、美濃地域に日照りが続き、美濃郡司安八大夫安次は田んぼにいた蛇に、「水が欲しい。もし、雨を降らせたら俺の娘八又姫を嫁にやろう」とつぶやいた。蛇は即座に慈雨をもたらし、蛇は八又姫を夜叉が池にむかえる。この伝説については、岐阜県坂内村誌編集委員会編『夜叉が池』（坂内村教育委員会、1987年）や、安八太夫安次の子孫といわれる岐阜県神戸町の石原傳兵衛著・発行『夜叉が池説』（1991年）の書がある。夜叉が池は岐阜県坂内村の標高1105メートルに位置し、今でも雨沢の恵みの源泉として崇敬されている。先に紹介した高谷重夫氏によると、龍とか大



